

第二回 三国時代

1. 諸国の並立

中国の史書には「濊及び沃沮、高句麗は、もとは皆朝鮮の地である」と書かれている。朝鮮半島は、古朝鮮を経て、扶余（부여）、高句麗（고구려）、沃沮（옥저）、東濊（동예）、韓（한）などの在地勢力に分かれていった。

扶余は松花江流域に位置した国家で、紀元前3世紀にはその名が知られてきた。王の下には各小国を治める臣下がおり、連盟国家の形をとっていた。下戸（하호）と呼ばれる民は牧畜と農業を行い、戦争の際には下戸が補給を担当した。

高句麗は史書によると¹、扶余から亡命した朱蒙（주몽）が卒本（졸본、現在の中国遼寧省桓仁とされる）に建国した。その後、周辺の国々を征服し、首都を国内城（국내성、中国吉林省集安）へ移し、巨大な王国を作り上げた。

一方、東海岸部には、沃沮と東濊の部族が住んでいた。現在の咸鏡道一帯に沃沮が住み、その南の江原道一帯が東濊の住地であった。沃沮はその部族内で南北の大きな勢力に分かれ、一つの王権に統率されず、いくつかの君長によって治められていた。咸興平野を中心に農業を行い、高句麗に対して特産物を捧げていた。東濊は海産物の豊富なことで中国にまで知られ、それらを交易していた。

韓は朝鮮半島の南部に広く居住し、馬韓・辰韓・弁韓の三韓²に分かれていた。これらの部族は各集落で国を形成し、三韓全体で80弱の小国があった。韓の諸国の長は臣智（신지）、邑借（파차）と呼ばれ、また各国に一人ずつ天君と呼ばれる司祭がおり天神を祭っていた。三韓では稲作が盛んであり、鉄製農具の開発が進んだ。これらの稲作と金属器の文化は、日本の稲作の始まりを促した。

扶余・高句麗・沃沮・東濊・三韓には、それぞれ天を祭る行事があったとされる。古朝鮮の故地に住む諸勢力に風俗の共通性をあつたことがうかがえる。

朝鮮半島は、かつての奴隷制社会から、人民を公民として扱い収税する封建社会へと変わっていった。それは高句麗や百済・新羅といった大きな封建国家の成立をよぶことになった。

2. 高句麗の発展

二世紀に入り高句麗は故国川王（고국천왕、在位179-197）のもとで王権を強化し、部族国家から中央集権国家へと変わっていった。官位制が整備され大対盧（대대료）・太太兄（태대형）と呼ばれる王の直属官僚が力を持つようになり、また低階層出身の国相（大臣）である乙巴素（을파소）は、貴族の権力を抑え農民保護政策を打ち出した。

強化された王権のもと高句麗は国力を増大させ、三世紀の初めには首都を卒本から国内城（국내성）に遷し、より南方へと次第に勢力を伸ばしていった。

しかし四世紀後半、中国の前燕や南方の百済と戦い故国原王（고국원왕、在位331-371）が戦死するという国家の危機を迎え、小獸林王（소수림왕、在位371-384）は仏教を受け入

¹ 高句麗は『三国史記』によると、紀元前37年の建国であるが、中国の史書に名が見えるのはそれ以前であり、紀元前2世紀頃には何らかの勢力があったとされている。

² 三韓の地には、もともと辰国と呼ばれる国家があったとされている。

れ、太学の設立、律令の整備を行い、国の建て直しをはかった。

広開土王(광개토왕、在位391-413、好太王とも呼ばれる)は18才にして王位につき、征服事業に積極的にのりだした。「永楽」という独自の年号を使用し、遠征を繰り返した。百済や新羅と戦う一方、遼東への進出を果たし、高句麗の領域は飛躍的に拡大した。

次の長寿王(장수왕、在位413-491)は79年間の治世において、「延寿」年号を使用し、外交政策によって高句麗の国力を高めた。427年、平壤(평양)への遷都を行い本格的に南進政策を推し進め、漢江流域から遼河・松花江流域に至る大きな領土を持つに至った。

この頃に建てられた広開土王碑が中国の集安にあり、当時の高句麗の事績が記されている。また集安や平壤の壁画古墳には、当時の人物図や四神図が描かれている。これらの遺跡は、当時の高句麗の隆盛を、我々に伝えてくれる。

3. 百済の建国

百済(백제)の建国神話によると、高句麗の朱蒙の息子である温祚(온조)は紀元前18年に慰礼城(위례성、ソウル)で百済を建国したとされている。この神話から百済は高句麗と同じく扶余の系統をくむ国家であると考えられている。建国当初の国力は弱く、馬韓に朝貢していたが、漢江流域で勢力を伸ばし、国家体制を整え中央集権国家として成長していった。

近肖古王(근초고왕、在位346-375)の時代に入り、百済は大々的な征服事業に乗り出し、馬韓を併合し、高句麗を攻撃して故国原王を戦死させた。これにより全羅道・忠清道・京畿道の全域から江原道・黄海道に及ぶ広大な領域を支配するようになり、また中国の東晋や倭との交易を行って国際的な地位を高めた。次の近仇首王(근구수왕、在位375-384)の時代にも隆盛は続き、枕流王(침류왕、在位384-385)の時代に仏教を信奉するようになった。

しかし396年、高句麗の広開土王の軍勢が首都の漢山城³(한산성)を襲い、高句麗の脅威に対抗するのが難しくなってきた。475年には、高句麗の長寿王の攻撃によって漢山城が陥落し、蓋鹵王(개로왕、在位455-475)が殺されると、首都を南の熊津(웅진、公州)に遷した。

しばらく国は混乱し、国王が暗殺されるなど有力貴族の反乱が続いたが、武寧王(무녕왕、在位501-523)がようやく混乱を治め、538年、聖王(성왕、在位523-554)が都を泗泚(사비、忠清南道扶余)に遷した。聖王は中央官署の整備などにより国力を高め、551年には新羅と同盟して高句麗を攻撃し、再び漢江流域を領土とした。

しかし553年に新羅の真興王(진흥왕、在位540-576)の裏切りによって、再び漢江流域を失い、自ら新羅へと攻め入った聖王は、554年の管山城(관산성、忠清北道沃川)の戦いで戦死した。これ以降、百済は新羅との戦争を繰り返すことになった。

現在、公州郊外には宋山里古墳群(송산리고분군)が残っている。1971年、武寧王陵が未盗掘のまま発見され、装身具・武具などと共に「寧東大將軍」の墓誌が見つかった。百済は強大な高句麗と台頭する新羅に挟まれながら、中国や倭との外交を重ね、国際性豊か

³ 漢山城は旧首都である慰礼城の近郊、南漢山付近に存在していたと考えられている。371年に遷都した。

な文化を形成していった。

4. 新羅の勃興

建国神話によれば、新羅(신라)は当初徐那伐(서나벌)と名乗り朴・昔(석)・金と三つの氏族が交代で長⁴となっていた。当初は辰韓の中の一小国であり、首都慶州(경주)周辺をようやく支配するだけの勢力であった。奈勿王(내물왕、在位356-402)の時代になり、辰韓十二国の盟主となり、洛東江以東を領土とするようになったが、国力は未だ高句麗や百済に及ばず、高句麗を兄とした兄弟国として従属していた。

五世紀の半ばから徐々に高句麗の支配から脱し、智証王(지증왕、在位500-514)の時代に東海岸部や于山国(우산국、鬱陵島)を征服した。法興王(법흥왕、在位514-540)の時代に入ると、国号を新羅と変え王を名乗り、貴族の勢力を抑えて仏教を受容し、官位制や身分制を整え、律令を發布して王権強化につとめた。

532年、金官加耶(금관가야)を滅ぼし、次の真興王(진흥왕、在位540-576)はさらに百済から漢江流域を奪い取り、562年には大加耶(대가야)を滅ぼし加耶諸国を征服した。また、北は高句麗と戦い、咸興平野まで進出するに至った。

新羅は三国の中で最も遅れて仏教を受容したが、その信奉は篤く、護国仏教を発展させた。「王即仏」として王の権威を高めるとともに、大きな仏教行事をとり行い、各地に巨大寺院を建立した。また中国へ留学する僧侶も多く、円光(원광)や慈蔵(자장)は帰国して新羅の国政に活躍した。円光は「世俗五戒」を花郎徒(화랑도)⁵に与え忠・孝・信の精神や臨戦不退の精神などを教え、慈蔵は唐制の政策をとるよう進言し、仏教による人心の統一に励んだ。

5. 加耶の興亡

この時代、洛東江下流域では弁韓や馬韓の小国がひとつの国家にまとまることなく、加耶諸国と呼ばれる国家群を形勢していた。

加耶諸国の中で大きな力を持っていたのは金官加耶(金海)と大加耶(高靈)だった。金官加耶は鉄を大量に産出し、海上貿易が活発であった。沿岸部の加耶諸国と共に倭(日本)や百済と通交し国力を高め、やがて加耶南部諸国の主導権を握るようになった。

五世紀後半に入ると大加耶が台頭し、加耶西部諸国の盟主となって、中国に使節を送るほどの国力を持つようになった。この頃に大加耶の楽士であった于勒(우륵)が王命によって十二絃の琴を作り、今も加耶琴として世に伝わっている。

513年、百済の武寧王は加耶地域への侵攻を始め、大加耶は新羅との同盟を求めた。しかし、新羅もまた加耶地域への侵攻の意図を持っており、同盟は数年で破れ、新羅は524年に

⁴ 建国初期は王を名乗らず、居西干・次次雄・尼師今・麻立干という、固有語に基づく称号を使用していた。

⁵ 上級貴族の子弟による青年集団で、仏教思想や神仙思想のもとで修養に努め、戦時には戦士として働いた。その指導者は花郎と呼ばれ、金庾信などが花郎出身として知られている。

侵攻を始めると、532年に金官加耶を併合するに至った。

金官加耶を滅ぼした新羅の侵攻に、加耶南部の安羅（안라、咸安）は倭や百済に救援を求めたが、百済もまた加耶地域への侵攻の手を緩めようとせず、加耶諸国は百済と新羅の勢力争いの場と化した。554年、管山城の戦いで百済を破った新羅は、562年に大加耶を滅ぼし、加耶諸国は新羅の領土となった。

6. 七世紀の動乱

589年、隋が中国を統一し、高句麗との間に緊張状態が訪れた。612年、隋は113万の兵で遠征を行い、海陸の両面から侵攻してきた。高句麗の乙支文徳（을지문덕）は、清土戦術で敵を退け薩水（살수、清川江）で殲滅戦を行った。隋はさらに二度にわたって遠征してきたが、どちらも失敗に終わった。

その後、唐が隋に代わって中国を統一すると再び緊張状態に陥り、高句麗の実権を握った淵蓋蘇文（연개소문）は唐との対決姿勢を強めた。645年に唐の皇帝である太宗が親征を行い、遼東半島の安市城（안시성）を攻撃したが、陽万春（양만춘）が三ヶ月の間、城を固く守り、唐の軍勢を撤退させた。唐はまたその後、647年・648年の二度の遠征を行ったが、それらも退けた。しかし、唐との対決で高句麗は国力をひどく消耗してしまった。

647年、金春秋（김춘추、後の太宗武烈王、在位651-654）が金庾信（김유신）とともに真徳女王（진덕여왕、在位647-654）を即位させると、高句麗の疲弊を見て、唐との連携による領土拡張政策を推し進めた。660年、蘇定方率いる唐軍と金庾信が率いる新羅軍が、黄山（황산、忠清南道連山）で百済軍を撃ち破り、泗沘を陥落させ百済を滅ぼした。663年には百済の残存勢力である福信（복신）が日本に居た王子である豊璋（풍장）を押し立てて、日本軍の助勢を受け周留城（주류성、忠清南道韓山）で兵を起こしたが、これもまた白江（백강、日本では白村江と呼ぶ）で敗れ、百済の復興運動は潰えた。

その頃、高句麗では唐に対して徹底抗戦を導いた淵蓋蘇文が死亡し、国内が混乱していた。その隙に乘じ、唐・新羅の連合軍は高句麗を攻め、668年、平壤城を陥落させ、高句麗を滅亡させた。

こうして百済・高句麗の両国を滅ぼした新羅は、その後、唐と半島の領有を巡って争うこととなった。唐は百済と高句麗の故地に都護府を設置し、さらに新羅まで占領しようとしたが、高句麗と百済の遺民が唐に抵抗して新羅と力を合わせて唐を撃退していった。過去の怨根を越え民族の力をひとつにし、かろうじて民族の滅亡を防いだ。676年、唐は平壤にあった安東都護府を遼東に移し、新羅は大同江以南の地を確保した。